

はじめに

20世紀後半の30年間は、近代の終焉、進歩の終焉、等等、「近代の特徴と思われていたものの『終わり』がいたるところで宣言され」、都市計画の世界でも、新しいパラダイムを求めようとする動きの芽生えがみられた。既に、多くの予兆が現れており、社会は大きく変わろうとしている。

「都市計画」は一般的な社会用語としては<社会生活=都市生活>の思いから、地球環境から「まちづくり」まで全てを「都市計画の対象」とするかの観がある。しかし、一般に「計画」とその「対象領域」は不断のものであり、とりわけ物的空間として都市を捉える場合には、対象範囲の限定はきわめて重要なものとなる。それでもなお、都市計画は広範な空間的意味と向き合わなければならない、21世紀のはじめにあたり、都市計画・都市設計のあり方をもう一度編纂しなおす意味は大きいと考える。

現在では「都市計画・都市設計」にかかわる優れた先行書、より細かな分野に限定しての解説書、海外事例の紹介書のような類が多数発行されている。われわれの先輩である笠原敏郎博士が内務省で「都市計画」という新しい技術の普及に努めはじめてわずか100年しか経過していないにもかかわらず、その需要と普及は目を見張るものがある。本書を著すにあたり、多くの先人の知識、知恵を引き継いでいることは言うまでもない。笠原敏郎博士、市川清志博士の教育の流れを経て、なが年建築学を興味の対象とする学生に対して講義を行ってきた経験から本書では、「都市計画・都市設計」として学ばなければならない基礎的な事項を押さえつつ、21世紀を迎えて全世界的な動向として注目される環境問題や情報社会、住民参加などの新たな課題も視野に入れての構成を心がけた。社会における様々な業務においても身近な手引書となるよう、具体的事例を多く取りあげている。

本書の特徴をまとめれば次のように整理できる。

- ① 基本的には建築学を学ぶ学生にとって最低限必要な「都市計画・都市設計」の基礎的知識—概念・理念・キーワード—をできるだけ網羅し、平易な解説を試みた。
- ② 都市計画・都市問題にかかわる多くのキーワードを取り上げ、読者自身の学習によりその十分な理解につながるような基本的概念を著わした。
- ③ 「都市計画・都市設計」のテクニックや制度を網羅的に紹介するのではなく、その具体的な事例を掲げて理解の手助けとなることを目指した。
- ④ 多分野にわたる各執筆者の「都市計画」講義のエッセンスをできるだけ多く盛り込むよう努めた。
- ⑤ これからの都市設計の重要なテーマとなる「景観」については、漠然とした概念のみでなく、既往の研究成果を盛り込み、一見捉えどころのないようなこの概念が明確に理解できるよう心がけた。

本書は構想・準備段階から5年以上の年月をかけてようやく脱稿に至っている。その間、都市計画法の改正をはじめ多くの部分でデータや内容の変更を余儀なくされたが、このような手間をかけた背景には、執筆者らが自身の研究活動を一切おろそかにしなかったことがあげられよう。研究活動の成果は本書の随所にみられ極めて先端的な話題が盛り込まれている。毎回の講義に最低10冊ずつ関連

図書を紹介しつづけた経験を持つが、本書がその基幹となることを願っている。

なお、資料の提供に快く協力いただいた方々に心から謝意を表するとともに、川島和彦氏ならびに共立出版（株）の平山靖夫氏、斉藤英明氏にはたいへんご苦勞をおかけした。厚くお礼を申し上げたい。

最後に、ぜひ本書の感想をお寄せいただきたい。われわれ研究者は日々精進に務め、暫時内容を補完・改訂していきたいと考えている。

2002年3月

監修者 小嶋 勝衛

第2版の刊行にあたって

初版が刊行されてから6年が経過した。都市を取り巻く社会・経済環境の変化は著しく、度重なる都市計画法の改正や関連諸制度の見直しも行われた。これらに対応するとともに、新しい計画事例を加え、第2版としてここに刊行する。第2版刊行にあたっては、共立出版(株)の佐藤雅昭氏、鶴飼訓子氏にご苦勞をおかけした。厚くお礼を申し上げたい。

2008年11月

監修者 小嶋 勝衛

第3版の刊行にあたって

2002年の初版から第2版の刊行まで6年、今回の第3版までは15年となる。この間、15回の増刷を数えたので、ほぼ1年に1回の増刷となり、数千人の方々の目に触れたということになる。著者等にとってはこの上ない喜びであるとともに、責任の大きさを改めて感じざるを得ない。

初版の「はじめに」にも述べたように、都市計画という技術は、設計という行為と不可分であることから、本書は「都市計画」と「都市設計」を柱とした。そして、その特徴は初版以来、建築学を学ぶ学生にとって最低限必要な基礎知識をできるだけ平易に解説することで、読者の自ら学ぶ意欲を促すことに努めたことである。そのため、都市の計画と設計の一体化の理解がなされるよう多くの具体的事例を紹介している。

都市計画は、その時代に発明・発見され、普及した事象の後に必ずといっていいほどそのあり方が問われる。都心からはなれた幹線道路沿いにロードサイド店が増加すると、駅前の商店街が衰退し、活性化を求める都市計画が出される。震災があれば、長大な防波堤と景観の両立を求める都市計画が求められる。少子高齢化の深化は、空き家問題の解決やコンパクトシティの形成を促す。ある程度の法的拘束力を有する都市計画は、都市のあり方を自ら進めると、独善的との批判を受ける。そのため、都市計画が社会・経済状況のピークから一歩遅れることは致し方ないといえるが、これからは、今後の都市のあり方を徹底的にシミュレーションして、膨大なデータを示しながら、都市環境問題、事前復興、過疎化対策などを担う都市の計画を進めるべきと考える。いずれにしても基礎知識がなければその上に蓄積すべき新たな知識や知恵も生まれにくい。本書を通じ都市計画への理解を深め、さらにまちづくりや関連の分野に領域を広げ、都市計画の進展に貢献することを期待したい。

今回はこれまでの著者に加え、3名の方に最先端の事例の紹介を担当いただいた。また、出版に際しては、共立出版(株)の佐藤雅昭氏ならびに野口訓子氏にお世話になった。記して厚く御礼を申し上げます。

なお、2017年はわれわれの恩師である市川清志先生の生誕100年の節目であり、その年に第3版を刊行できるのは弟子として大きな喜びでもある。

2017年2月

監修者 小嶋 勝衛
横内 憲久